【作品紹介】

片山尚景筆　花鳥図屏風　二曲一双（旧真照寺本堂襖絵）―京都と平戸を往復した絵師・片山尚景の有年紀作品―

資料課　杉田真菜

１．はじめに

片山尚景は、「日親上人徳行図巻」（本法寺（京都市）蔵）の奥書によれば[1]寛永５年（1628）の生まれで、江戸時代初期～中期にかけて活躍した画家である。享保２年（1717）９月９日に亡くなり、平戸の本成寺に葬られた[2]。夭逝した可能探幽の弟、狩野尚信の門人として知られている[3]。

２．画家の出自と師弟関係、作品について

前田香雪『後素談叢』や森大狂『近古芸苑叢談』によれば片山家は加賀の出身で、尚景の曽祖父片山立賢は天正頃に小田原の北条家に仕えて武名を上げ、北条氏滅亡後は京都に住んでいた。尚景祖父の立徳の代には豊臣氏を憚り丹後国の三村郷に潜居し、三村弥三郎と名乗って医師として生活している。その後世情が変化したため京都に帰って片山姓に復帰し、医業の傍らで画を狩野光信に学んだ。朝岡興禎『古画備考』では尚景父の片山正信は狩野興以に学んでおり、孫の尚景も初め父に学び、のちに狩野尚信に師事、宝永２年（1705）に 78 歳で法橋に叙任された。

尚景は妙心寺聖澤院の襖絵（京都市）や、「なべこうむり日親」で知られる本法寺で「日親上人徳行絵巻」（本法寺（京都市））等を制作した。宝永度（宝永６年（1709））の内裏造営時の障壁画制作にも従事しており、『禁裏御絵割並坪附』によれば、長橋の御輿寄に官女遊図を描いている[4]。

３．「花鳥図」（宮津市・真照寺）について

作品は最近まで真照寺本堂を飾る襖絵であったが、近年、屏風へと改装され（宮津市史の時点では引手がついている）、現在では２曲１双の屏風になっている。

画面は、松が画面右端から右隻上部を覆うように枝ぶりを広げている。松の下には鶴が２羽、画面下部には濃墨の岩および剥落しているが淡彩で水流が見られ、岩陰からは竹が覗く。左隻右方は、右隻２扇目と同様梅の枝ぶりが見える。梅の幹がないことや岩がつながらないこと、また引手跡が途切れていることから、左右隻の間の画面が切り詰められたことが想定される。ただし、両隻の四周には縁取りの跡があり、現在の表装になる以前にすでに切り取られていたようである。

左隻左下と右隻右下には落款「法橋尚景八十六歳筆」と「尚景」朱文方印があり、正徳３年（1713）に描いたものであることが分かる。なお、この年再び城主の命により平戸へ帰っている[5]。

真照寺はかつて、現在宮津中学校がある題目山麓の高台に位置していたが、江戸時代末期から明治時代にかけて山崩れと火災の難に相次いで遭っている。襖絵は運び出されて無事だったようだが、現在の本堂は場所を南方に移して再建されたもので、現在の地に移った後にも本堂の向きが 90 度変わるなどの変更もあった。そのため、写真２も当初の姿をとどめたものではなく、本堂の再建時などに画面の大きさが変更されたものと思われる。

４．作品比較

片山尚景の作品として知られる「妙心寺塔頭霊雲院の書院画」について、土井次義氏に「元信画に学んだ形跡の著しい」と指摘するが、当作品については元信画の影響というよりはむしろ探幽やその後に通じるような淡泊な感覚、余白を十分にとった奥行構成が見られる。元信が先に描いた霊雲院において、空間の連続性を鑑みて先例に合わせた図様の採用といえ、幅広く描き分けができる十分な器量をもっていたことが伺える。

片山尚景の師である狩野尚信は、兄探幽の画風から抜け出し、兄探幽よりも湿潤な墨調による没骨描写や探幽とは異なる感覚での大胆な余白による画面構成などを特徴とする独自の画風を築いた。師尚信の「鶴図屏風」（真田宝物館）、「李白観瀑・剡渓訪載図屏風」（筑波大学付属図書館）のような松の表現や岩に輪郭線を引かず没骨風とする点は今回の真照寺本にも共通しており、

写真１　片山尚景筆　花鳥図屏風　二曲一双（旧真照寺本堂襖絵）

大画面に大胆な余白で描くのは尚信の寛永10年（1633）頃の作と言われる「山水花鳥図屏風」（根津美術館）に通じている。

父片山正信は狩野興以の門人であり、尚景は早逝した狩野尚信が持った門人として知られる三人のうちの一人である。画風からは、興以そして尚信へと受け継がれていたことが窺える。

尚景は寛永５年生まれなので、狩野尚信が寛永７年（1630）、京都から江戸に召された後に江戸で門人になっている。鶴澤派が東山天皇の命で上洛するのは元禄年間（1688-1704）のことで、尚景は鶴澤派が京都に来る以前に京都の狩野派の一人として活躍した点でも注目すべきであろう。その後は平戸藩のお抱え絵師として迎え入れられるものの、京都と平戸を行き来している点からも、鶴澤派以前から京都での需要が高かったことは特筆すべき事柄である。

５．片山尚景の鑑定活動

法隆寺の荘園として栄えた斑鳩寺（兵庫県揖保郡太子町）の「斑鳩寺記録乙」には尚景の名が見える。１つは京都の絵師として掲載されている記事、もう１つは尚景が土佐光高とともに筆者の鑑定をしている記事で[6]、やや長いが、片山尚景の研究においてはこれまで参照されてこなかった資料のため、引用する。

○太子四幅絵伝修補事

同年[7]、太子縛傳 (ママ) 四幅對者、天文年中湯淺河内守寄附于當寺也、見畫之于裏書焉、當寺所傳古老筆者土佐將監光廣矣、今元禄十六癸未春、繪上洛也、土佐將監光高父子遂訂正也、光高曰、是繪非予家光廣、筆者不知也、地取善、筆法幽微也、又画工法橋片山尚景曰、是勝筆也、非古法眼父子、又エイトク或ハウタノスケニアラズ、是レギヨクラクガ筆ナラム、草木岩取之鷹答尋常非所及畫師矣也、是年於京師令修補者也

○太子達磨御対面之賛画事

同年[8]、当寺円珠院弘賢者、寛文延宝之際、洛東青蓮院之門主　尊証親王之仕」簾下也、尊証自書達磨大師之詠歌而賜弘賢、以之附当寺上宮」殿、

今宝永四丁亥年、京師命画工法橋片山尚景、片岡之太子達磨対面之」尊像而令其以　親王之賛接飾也

また、ここで尚景後の片山家についても言及しておく。尚景が拝命した平戸藩の御用絵師の地位は片山家が継承していくことになるが、代々狩野派に入門しており、尚景二男の常知は養朴常信に、三男の常将は如川周信に、孫の尚斎は随川甫信に、曾孫の美道は駿河台狩野家の洞春美信に絵を学んでいる。また、その次の代の片山尚栄が師事した絵師は不明だが、尚栄は藩主の肖像画を制作するにあたって木挽町狩野家に本絵制作を依頼しており、尚栄の代になってもなお狩野家とのつながりが保たれていることが窺える。

６．結論

今回紹介した片山尚景は宮廷の御用や寺院、さらには平戸城の障壁画制作と多彩な場で活躍し、また今回の調査の過程で鑑定も行っていたことが分かるなど、京都と平戸を往復しながら多彩な活動をした画家であった。

現在宮津に残る作品は四条派一門による智源寺の天井画や障壁画に代表されるように、近世後期以降、本庄松平家が入封して以降の近世後期のものが大半である。近世前半の宮津藩は一時幕府領を挟んで京極氏、永井氏、阿部氏、奥平氏、青山氏と藩主の交代が続いており、本庄家入封以前の資料は近年も発見が続いているところである[(9)]。本庄家以前に制作された本作品は、早世した狩野尚信の３人弟子･片山尚景の作品ということとともに、宮津藩を取り巻く歴史資料としても貴重といえよう。

参考文献

・若杉準治監修『丹後の錦』1981年

・『宮津市史』史料編第５巻、1994年

【注】

（１）「日親上人徳行図巻」（本法寺（京都市）蔵）の奥書に「開山日親上人一代徳行之図／画所片山尚景七十七歳而／拭老眼抽丹青自書以永／為寺鎮／宝永元甲申歳八月日／当住廿七世／成遠院／日達（花押）」とあり、宝永元年、片山尚景77歳の筆であることがわかる。

（『本法寺の名宝＿光悦・等伯ゆかりの寺』展図録（茶道資料館、2014）など）

（２）子孫の片山尚彦（天保２()―？）による聞き書きを記した前田香雪『後素談叢』巻３。

（３）『古画備考』四十三狩野門人譜による。

（４）藤岡通夫『京都御所〔新訂〕』（中央公論美術出版）所収

（５）『後素談叢』巻三

（６）阿部猛、太田順三編『播磨国鵤荘資料』八木書店、1970年

（７）元禄16年（1703）

（８）寛永４年（1627）

（９）安藤勝昭、安江範泰「収蔵資料調査報告　郡上藩主青山家と家臣のアーカイブズ・坂東家文庫を含む資料群　調査報告（その一）――その概要と伝来経緯について――」『郡上市歴史資料館　館報』第５号、令和５年８月